

母體乳腺機能ト乳兒生育トノ關係ニ就テ

金澤醫科大學産科婦人科學教室(笠森教授指導)

副 手 深 山 大 和

Yamato Miyama

(昭和15年7月4日受附)

内 容 抄 録

我教室並ニ日本赤十字社石川支部産院ニ入院又ハ外來ヲ訪レ、正常分娩ヲ經驗セシ健康ナル婦人 669 人ト其兒1625人ニ就キテ、乳兒哺育方法ト、結婚年齢及ビ初産年齢、授乳期間、母乳榮養兒ト人工榮養兒ニ於ケル學齡期以前ノ死亡率ニ就テ調査シ、更ニ母ノ學歷ノ

明カナル者364人ニ於テハ、母ノ學歷ト乳兒哺育方法、兒ノ學齡期以前ニ於ケル死亡率ト母ノ學歷トノ關係並ニ兒ノ死亡年齢ト母ノ學歷トノ關係ニ就キテ調査シ、仍テ母體乳腺機能ト乳兒生育トノ關係ヲ觀察セリ、

目 次

第1章 緒 言	(1) 母ノ學歷ト乳兒哺育方法
第2章 調査成績	(2) 母ノ學歷ト兒ノ學齡期以前ニ於ケル死亡率トノ關係
第1節 結婚年齢ト乳兒哺育方法	(3) 母ノ學歷ト兒ノ死亡年齢
第2節 初産年齢ト乳兒哺育方法	第3章 總括並ニ考案
第3節 授乳期間	第4章 結 論
第4節 母乳榮養兒ト人工榮養兒ニ於ケル學齡期以前ノ死亡率	文 獻
第5節 母ノ學歷ト哺育兒	

第1章 緒 言

Roeses(1905)⁽¹⁾ハ學齡兒童ニツキ母乳榮養兒ト人工榮養兒トヲ比較シテ、前者ノ身長及體重等ハ何レモ後者ニ優リ、且ツ哺乳期間ノ長キ程其差著明ナルヲ知リ、尙又兵役調査ニ於テモ母乳榮養者ノ合格率ノ多キヲ證シ、仍テ氏ハ結論トシテ、全國民ノ活動力ハ婦人ノ哺乳力ノ如何ニ依ルト述ベタリ。K. Oppenheimer(1905)⁽²⁾ニ據レバ巴里ニ母乳ヲ供給セル佛國ノ或ル地方ニ於テ、之ヲ停止セルニ、乳兒死亡率ハ約半數ニ

減ジタルヲ知リ、尙又壯丁検査ニ際シ母乳ヲ他ニ出ス地方(衛生的農業地)ニテハ不合格者30%ヲ算シ、母乳ヲ他ニ出サザル地方(非衛生的工業地)ニ於テハ反ツテ18%ノ不合格率ヲ示セリ。母乳兒ト人工(混合)榮養兒ノ比ニ關シSteinhard(1906)⁽³⁾ハNürnbergニ於ケル新産兒817人ヲ檢セルニ、母乳又ハ混合榮養兒ハ93.2%(797人)ニシテ人工榮養兒6.8%ヲ算シタリ。H. Opitz(1918)⁽⁴⁾ノ報告ニ據レバ母乳榮養兒90.6%、人

工及混合榮養兒ハ9.4%ヲ示セリ。本邦内閣統計表ヲ見ルニ北陸三縣ニ於ケル出生率並ニ乳兒死亡率ハ共ニ著シク多數ヲ示セリ。茲ニ於テ先ヅ考慮スベキ事項ハ母體乳汁分泌ノ良否如何ノ問題ナリトス。篠田氏(昭和15年)⁽³⁶⁾ハ東京等ノ大都市婦人ノ半數以上、就中中流以上ノ家庭婦人ハ乳汁分泌不足ヲ訴ヘ、催乳法ニ苦心スルトモ僅カニ $\frac{1}{2}$ 〜1月ノ分泌持續ヲ得ルニ過ギザル者多シト言ヘリ。一般ニ分娩後3〜4日ヲ經過セザレバ分泌量ハ充分ナラズ。從ツテ新産兒ノ初期體重減少量ハ増加シ、ソノ回復日數ハ平均10日以上ヲ要スルコトハ吾人ノ臨床上經驗スル所ナリ。Blumenfeld(1914)⁽³⁵⁾ハ生後10日間ニ分娩直後ノ體重ニ復セザルモノ62.5%ヲ算シ、Brüning(1921)⁽⁶⁾ハ分娩後10日間ニ於ケル體重ノ回復率32%ヲ報ゼリ。然ルニ余(昭和15年)⁽³⁷⁾ノ調査ニ基ケバ金澤地方ニテハ乳汁分泌不足ヲ訴フル者僅カニ26.7%ニシテ、分娩後2日ニテ乳汁分泌量ハ哺育ニ適スル量ニ達シ、且ツ新産兒ノ體重復舊ハ平均6〜7日ナルヲ認メタリ。次ニ母體ノ乳汁分泌期間ニ關スル文獻ヲ索ムルニ、Steinhard(1917)⁽⁷⁾ハ201人中半年以上授乳セルモノ71%(141人)、半年以下ノ者29%(58人)ヲ算シ、H. Opitz(1918)⁽⁴⁾ハ1911〜1917年ノ平均授乳期間ヲ調査シ7.4ヶ月(1911〜13)〜7.9ヶ月(1914〜15)〜8ヶ月(1916〜17)トセリ。Halle(1916)⁽⁸⁾ハ生後10日間自家乳ニテ充分哺育セルモノ30%ナルヲ認ム。Cörper, Werner(1922)⁽⁹⁾ハ150人中3ヶ月間自家乳哺育可能ナルモノ86人、然ラザル者64人ヲ算セリ。W. Kahn(1922)⁽¹⁰⁾ハ17歳〜37歳ニ及ブ婦人ニ就キ調査セシニ、其内10人ハ4週間、14人ハ6週、10人ハ8週、5人ハ10週、91人ハ12週間自家乳ニテ哺育シ得タリト云フ。而シテ此調査材料ハ20〜28歳ノ婦人ニ依リテ大多數ヲ占メラルモノナリ。亦 Ploss(1883)⁽¹¹⁾ハ乳汁分泌ノ持續ニ著差アルヲ説ケリ。一般ニ歐洲ニ於テハ1〜1.5年以上ニ亙リテ自家乳哺育ヲ行フコトハ極メテ稀ナレドモ、我國中流以上ノ知識階級婦人ノ授乳期間ハ半年〜1年ニ亙リ、半年後ニハ分泌減

少ヲ認ムルモノ多シ。次ニ乳兒ノ死亡率ヲ見ルニ、都市ト村落トニ於テハ大ニ異ナリ、又大都市ニテハ所謂下町ト山ノ手トニ於テ差異アリ。昭和14年内閣統計局ノ調査ニ據レバ幼兒死亡率ハ0歳〜4歳315.9%(388.633人)、5歳〜9歳27.1%(33.358人)ニシテ、0歳〜4歳ノ者ノ主死因ハ(1)下痢、腸炎及胃潰瘍、(2)肺炎、(3)腦膜炎、(4)疫痢及赤痢、(5)氣管支炎及肋膜炎、(6)脚氣、(7)腎臟炎、(8)心臟病、(9)其他胃及十二指腸ノ諸種疾病、腦出血、惡性腫瘍等ナリ。次ニ乳兒死亡率ハ昭和10年度ニ於テ0ヶ月〜1ヶ月ハ男53.945人、女44.049人、1ヶ月〜12ヶ月ハ男126.936人、女106.769人ナリ。而シテ其主死因ハ(1)畸型及先天性微弱、(2)下痢及腸炎、(3)肺炎ニシテ以上ノ三因最モ多ク其他、(4)腦膜炎、(5)脚氣、(6)急性氣管支炎、(7)百日咳、(8)麻疹、(9)流行性感胃、(10)結核一般、(11)腎臟病、(12)外因死、(13)ヂフテリー、(14)赤痢等ヲ擧グ。市町村乳兒死亡率ノ比ヲ見ルニ、昭和11年度人口10萬以上ノ都市ニテハ生産100ニ對シ死亡9.8、其他ノ市町村ニ於テハ生産100ノ中死亡12.2ヲ算セリ。北陸三縣ノ乳兒死亡率ハ昭和10年度ニ於テハ石川縣(1000:14.7)、富山縣(15.2)、福井縣(14.2)、昭和11年度ニ於ケル石川縣(16.9)、富山縣(15.0)、福井縣(16.7)ニシテ、之ヲ他ニ比較スルニ東北六縣ヨリ更ニ大ニシテ正ニ全國第一位ニアリトス。古澤氏(昭和15年)⁽³⁸⁾ニ據レバ東京市住民ヲ工業群、商業群、小住宅群、中流群ノ四群ニ頒チ、其小兒死亡率ヲ比較セルニ工、商、小、中ノ順ニ減少シ、之レ衛生狀態及衛生思想ノ差異ニヨルト云ヘリ。川添氏(大正12年)⁽³⁹⁾ハ1週間以内ノ乳兒死亡率ハ15〜16%、1ヶ月〜1年ハ25〜26%ナルヲ報ゼリ。Zangenmeister(1922)⁽¹²⁾ハ授乳期間ト1年以内ノ乳兒死亡率トヲ比較シ、9ヶ月間母乳ヲ以テ哺育セル者ハ2%ノ死亡率ヲ示シ、3ヶ月ナルモノノ死亡率ハ10%、全ク母乳ヲ與ヘザル者ノ死亡率ハ27%ナルヲ報ゼリ。昭和14年度衛生局年報ニヨリ日本、伊太利、獨逸、英吉利、佛蘭西ノ1

年以内ノ乳兒死亡率ヲ見ルニ、昭和10年ニ於テハ日本10.7、伊10.1、獨6.8、英5.7、佛6.9ナルヲ見ル。

第2章 調査成績

調査材料ヲ二種ニ分類シ、母乳ノミニテ10ヶ月以上ニ互リテ兒ヲ哺育セシ母ヲ第1群トナシ、10ヶ月以内ニ人工榮養ヲ加ヘシ者ヲ第2群ト爲シテ之ヲ觀察セリ。

第1節 結婚年齢ト乳兒哺育方法

總テノ産兒ヲ悉ク自家乳ニテ哺育セシ者ト、一部又ハ全部ノ産兒ノ哺育ニ人工榮養ヲ加ヘタルモノトノ二種ニ大別シ、尙又17歳以下、18~22、23~27、28歳以上ノ4群ニ頒チテ之レヲ比較セルニ、各群間ニハ著明ナル差異ヲ見出サザルハ第1表ノ示スガ如シ。

第1表 結婚年齢

年齢	母乳ノミノ母		人工榮養ヲ加ヘシ母	
	例數	%	例數	%
16	8	1.91	2	0.8
17	12	2.87	18	7.17
	20	4.78	20	7.97
18	34	8.13	19	7.57
19	40	9.57	29	11.55
20	78	18.66	41	16.35
21	77	18.42	44	17.54
22	56	13.40	24	9.56
	285	68.18	157	62.57
23	36	8.61	18	7.18
24	27	6.46	30	11.96
25	22	5.26	13	5.18
26	9	2.15	4	1.59
27	7	1.68	5	1.98
	101	24.16	70	27.89
28	6	1.44	2	0.77
29	3	0.72	1	0.40
30	3	0.72	1	0.40
31	0	0	0	0
	12	2.88	4	1.57
計	418		251	(總數 669)

第2節 初産年齢ト乳兒哺育方法

前項ト同様ノ意味ニ於ケル母ノ分類ト、前項ト同様ノ年齢別ニ頒チテ之ヲ觀察セルモ、第2

表ノ示ス如ク著明ナル差異ヲ認メシメズ。即チ第1—2表ハ17歳以下ノ若年者モ、又28歳以上ノ高年者ニ於テモ、結婚年齢並ニ初産年齢ハ乳汁分泌ニ關シテ影響少キ事ヲ示スモノナリ。

第2表 初産年齢

年齢	母乳ノミノ母		人工榮養ヲ加ヘシ母	
	例數	%	例數	%
17	2	0.48	0	0
18	10	2.39	8	3.18
19	23	5.50	14	5.57
20	44	10.53	36	14.33
21	62	14.83	27	10.74
22	66	15.79	38	15.33
	205	49.04	123	49.15
23	56	13.40	28	11.14
24	48	11.48	34	13.53
25	41	9.81	30	11.90
26	22	5.26	12	4.77
27	13	3.11	9	3.57
	180	43.06	113	44.91
28	11	2.63	5	1.98
29	7	1.68	6	2.38
30	9	2.15	0	0
31	1	0.24	3	1.18
32	3	0.72	0	0
33	0	0	1	0.40
	31	7.42	15	5.94

第3節 授乳期間

生後15日以内ニ新産兒ノ死亡セル者ヲ除キ、母乳哺育者1107人、人工榮養ヲ加ヘシ者454人ニツキ授乳期間ヲ觀察セシニ、1年以内~2年ニ至ル者79.86%(884人)ヲ占メ、2年以上ニ及ブモノ20.14%(223人)ヲ示セリ。但シ1年以上母乳ノミニテ哺育スルニ非ズシテ、其間軟キ粥等ヲ補給スルモノナリ。人工榮養ヲ加ヘシ例ニ在リテハ授乳持續期間ハ1年以内ナルモノ71.8%(326人)ヲ占メ、1年以上2年ニ及ブ者28.2%(128人)ナリ。

第 3 表 授 乳 期 間

期 間	母 乳 兒		人 工 榮 養 兒	
	例 數	%	例 數	%
1 年 以 內	396	35.78	326	71.80
1 年—1.5 年	301	27.19	84	18.50
1.5 年— 2 年	187	16.89	42	9.25
2 年—2.5 年	135	12.19	2	0.45
2.5 年— 3 年	55	4.97	0	
3 年 以 上	33	2.98	0	
總 數	1561	70.92%	454	29.08%

第 4 節 母乳榮養兒ト人工榮養兒

ニ於ケル學齡期以前ノ死亡率

母乳兒總數 1157 人 (71.20%)，一部又ハ全人工榮養兒 468 人 (28.80%) ノ内ニテ，學齡期以前ノ死亡率ハ前者ニ於テハ 21.0% (243 人) ニシテ，後者ニ於テハ 27.86% (139 人) ナリ。即チ明ラカニ人工榮養兒ニ於テ死亡率ノ高キヲ示セリ。

第 4 表 母乳榮養兒ト人工榮養兒ニ於ケル學齡期以前ノ死亡率

	母 乳 兒	一 部 乃 至 全 人 工 榮 養 兒
總 數	1157 (71.20)	468 (28.80)
死亡數	243 (21.0%)	139 (27.86%)

第 5 節 母ノ學歷ト哺育兒

母ノ學歷ノ明ラカナル者 364 人ニ就キ，之ヲ高等女學校以上卒業者 (A)，高等小學校卒業者 (B)，尋常小學校卒業者 (C)，無學歷者 (D) ノ各部ニ頒チテ觀察セリ。

1) 母ノ學歷ト乳兒哺育方法

母乳ノミニテ哺育セル母ハ (A) 群ニテハ 52.8% (47 人)，(B) ニテハ 66.18% (92 人)，(C) ニテハ 66.66% (90 人) トナリ，人工榮養ヲ加ヘシ母ハ (A) ニテハ 47.2% (42 人)，(B) ニテハ 33.82% (47 人)，(C) ニテハ 33.34% (45 人) ニシテ，知識階級ニ屬スル (A) 群ノ母ニ在リテハ，乳汁ノ分泌不足ニテ人工榮養ヲ加フル者多ク，(B)，

(C) 群ノ母ニ於テハ概シテ乳汁分泌良好ニテ，人工榮養ヲ加フル者少ク，且ツ後二者間ニハ著明ナル差異ヲ示サザルヲ知レリ。

第 5 表 母ノ學歷ト兒ノ死亡率

母ノ學歷	母乳榮養ヲ行ヘル母		人工榮養ヲ行ヘル母	
	例數	%	例數	%
高等女學校以上卒業 (A)	47	52.80	42	47.20
高等小學校卒業 (B)	92	66.18	47	33.82
尋常小學校卒業 (C)	90	66.66	45	33.34
無學歷 (D)	1		0	

2) 母ノ學歷ト兒ノ學齡期以前ニ於ケル死亡率トノ關係

兒ノ總數 930 人中，(A) 群ニ屬スル者 207 人ニシテ，其學齡期以前ノ死亡者 20.29% (42 人)，(B) 群ニテハ 312 人中 20.83% (65 人)，(C) ニテハ 409 人中 27.87% (114 人) ナリ。即チ其死亡率ハ (A) ニ於テ最モ少ク，(C) ニ於テ最モ多シ。

第 6 表 母ノ學歷ト兒ノ學齡期以前死亡率

	A 兒	B 兒	C 兒	D 兒	總數
例 數	207	312	409	2	930
死亡數	42	65	114	2	223
%	20.29	20.83	27.87	100.00	23.97

3) 母ノ學歷ト兒ノ死亡年齡

生後 15 日以内，1 年以内，1 年以上學齡期迄ノ 3 群ニ頒チテ兒ノ死亡率ヲ見ルニ，

第7表 母ノ學歷ト兒ノ死亡年齡

母ノ學歷	生後15日 以 内		1年以内		1年以上 8年マデ	
	例數	%	例數	%	例數	%
A	22	37.30	10	14.48	10	10.54
B	20	33.90	23	33.33	22	23.15
C	16	27.12	35	50.71	63	66.31
D	1	1.68	1	1.48	0	
總數	223	59	69		95	

i) 15日以内ニ死亡セシ者59人中、(A)群ニ屬スル者37.3%(22人)、(B)ニ屬スルモノ33.9%(20人)、(C)ニ屬スル者27.12%(16人)ヲ示セリ。則チ新産兒ニ於テハ(A)群ノ生活力ハ最

モ微弱ニシテ、(C)群最モ強健ナルヲ示セリ。

ii) 1年以内ノ死亡者69人中、(A)ニ屬スル者14.48%(10人)、(B)ニ屬スルモノ33.33%(23人)、(C)ニ屬スル者50.71%(35人)トナレリ。之レ哺育上ノ注意ニ關係スル所大ニシテ、(A)群ニ於テ死亡率最少ニシテ(C)ニ於テ最多キヲ見ル。

iii) 1年以上學齡期マデノ死亡者ハ95人ニシテ、其内(A)ニ屬スルモノ10.54%(10人)、(B)ニ屬スルモノ23.15%(22人)、(C)ニ屬スル者66.31%(63人)ヲ算シ、其比率ノ差ハ(ii)ヨリモ一層顯著トナリ、母ノ學歷ノ低キ程新産兒期以後學齡期迄ノ小兒期ニ於ケル死亡率ノ多キヲ明示セリ。

第3章 總括並ニ考按

正常分娩ヲ爲シ且ツ産兒ヲ哺育セシ經驗ヲ有スル婦人669人ニツキ、先ツ結婚年齡及初産年齡ト乳汁分泌トノ間ニ於ケル關係ノ有無ヲ調査シ、次ニ此等婦人ノ兒1135人ニツキ乳兒哺育法及授乳期間並ニ乳兒及小兒死亡率ヲ檢シ、更ニ母ノ學歷ノ明ラカナル者364人ニツキテ學歷ト哺育方法、兒ノ學齡期以前ニ於ケル死亡率並ニ死亡年齡別等ヲ調査シ、カクテ母體乳腺機能ト乳兒ノ生育トノ關係ヲ觀察セル成績ヲ概括スレバ次ノ如シ。

(I) 結婚年齡ト乳汁分泌トノ關係(第1表)ニ就キテハ、16~31歳ノ健康婦人669人中自家乳ノミニテ兒ヲ哺育セシ者(A)62.48%(418人)、人工榮養ヲ加ヘシ者(B)32.52%(251人)ナリ。而シテ結婚年齡17歳以下ナル早婚者中ノ(A)ハ4.78%、(B)ハ7.97%ニシテ其差ヲ認メシムレドモ、18~22歳ノ適齡結婚者ニ於ケル(A)ハ68.18%、(B)ハ62.57%ニシテ全體ノ半數以上ヲ占メ、23歳~27歳ノ結婚者ニ於ケル(A)ハ24.16%、(B)ハ27.87%、28歳以上ノ晩婚者ニ於ケル(A)ハ2.88%、(B)ハ1.57%ヲ算セリ。即チ金澤地方ニ於テハ18~22歳マデノ結婚者ハ全結婚者ノ半數以上ヲ占ムルヲ知レリ。而シテ早

婚、晩婚ヲ通ジ(A)、(B)各群ノ間ニ著明ナル差異ヲ示サザルヲ認ム。

(II) 初産年齡(第2表)ニ就キテハ、17歳以下ノ者2名ニ過ギザルモ、18~22歳ニ於ケル(A)ハ49.04%、(B)ハ49.15%、23~27歳ニ於ケル(A)ハ43.06%、(B)ハ44.91%、28歳以上ニ於ケル(A)ハ7.42%、(B)ハ5.94%ナリ。即チ18歳~22歳、23歳~27歳ニ於テ初産ヲ經驗セル者大多數ヲ占メ、此等初産年齡ト乳汁分泌量トノ間ニハ一定ノ關係ヲ見出し得ザルナリ。

(III) 授乳期間(第3表)ニ就テハ、母乳兒1107名中母乳ノミニテ1年以上2年迄哺育セラレシ者79.86%、2年以上ニ及ブ者20.14%ナリ。但シ10ヶ月以内ハ母乳ノミニテ哺育シ其後ハ順次人工榮養ヲ加ヘシ事勿論ナリ。仍テ此調査ニ於テ北陸婦人ノ自家乳ヲ授乳スル期間ハ2年以上ニ亙ルモノ20%ヲ占ムルヲ知レリ。人工榮養ニテ哺育セル乳兒トハ生後10ヶ月以前ニ人工榮養ヲ加ヘシ者ヲ云ヒ、而シテ人工榮養兒454名中母乳給與ヲ1年以内ニ全ク中止セラレシモノ71.80%、母乳給與期間1年以上2.5年ニ及ベル者28.2%ナリ。生後滿10ヶ月ニ至ルマデ母乳ノミニテ哺育セル母70.92%(1107人)、10ヶ月以

内ニ人工榮養ヲ加ヘシ母 29.08% (454人)ニシテ、乳汁分泌ノ旺盛ナルヲ示セリ。

(IV) 母乳榮養ト人工榮養兒ニ於ケル學齡期以前ノ死亡率(第4表)

母乳兒 1157人 (71.20%) 中ノ此年齡ニ於ケル死亡者ハ 21.0% (243人)、人工榮養兒 468人 (28.80%) 中ノ同様死亡者 27.86% (139人)ニシテ、人工榮養兒ニ於テ遙カニ多數ヲ占ム。之レ人工榮養兒ハ母乳兒ニ比シ體質虚弱ニシテ抵抗力弱キニ基クモノト思考セラル。又人工榮養ノ種類ニ關シテハ牛乳最モ多ク、其他山羊乳、「キノミール」、練乳、粉乳、搗粉、重湯等ヲ主トシ、特ニ農村ニテハ搗粉ヲ多ク用ヒ、之レニヨル乳兒ノ榮養障碍少ナカラザルナリ。

(V) 母ノ學歴ト哺育兒トノ關係

(a) 母ノ學歴ト乳兒哺育方法(第5表)

母乳哺育ト加人工榮養哺育トヲ母ノ學歴ニ關シテ調査スルニ、高等女學校以上卒業者(A)ニ於ケル前者ハ 52.8%、後者ハ 47.2%ニシテ、即チ約半數ハ人工榮養ヲ加フ。高等小學校卒業者(B)ニ於ケル前者ハ 66.18%、後者ハ 33.82%ニシテ、即チ加人工榮養哺育ハ約 $\frac{1}{3}$ ニ過ギズ。更ニ尋常小學校卒業者(C)ニ於テハ前者 66.66%、

後者 33.34%ニシテ其率ハ(B)ト略々同様ナリ。即チ學歴ノ上昇ト乳汁分泌力トハ逆比スルコトヲ識レリ。

(b) 母ノ學歴ト兒ノ學齡期以前ニ於ケル死亡率(第6表)

女學校以上卒業者ノ兒 207人中、當該年齡ニ於ケル死亡者 20.29% (42人)、高等小學校卒業者ノ兒 312人中 20.83%、尋常小學校卒業者ノ兒 409人中 27.87% (114人)ノ死亡者ヲ算セリ。即チ女學校出身者ニ於ケル兒死亡率ハ最低ニシテ、尋常小學校卒業者ノ兒最モ多シ。

(c) 母ノ學歴ト兒ノ死亡年齡(第7表)

生後15日以内ニ死亡セル59人中、女學校卒業者(A)ノ兒 37.3%、高等小學校卒業者(B) 33.9%、尋常小學校卒業者(C) 27.12%ヲ示セリ。即チ新産兒ノ死亡率ハ學歴ト正比ス。而ルニ1年以内ノ死亡率ニ於テハ(A)ハ 14.48%、(B)ハ 33.33%、(C)ハ 50.71%ニシテ新産兒ニ於ケルト全ク相反ス。更ニ1年～學齡期ニ於テハ、ソノ差甚シク、(A)ニ於テ 10.54%、(B)ニ於テ 23.15%、(C)ニ於テ 66.31%トナル。之レ母ノ學歴ト乳兒哺育上ノ注意トハ平行スルニ依ル結果ト思考セラル。

第4章 結 論

(I) 乳腺機能ノ良否ト當該婦人ノ結婚年齡並ニ初産ヲ行ヘル年齡トノ間ニハ一定ノ關係ヲ認メズ。

(II) 生後10ヶ月間母乳ノミニテ哺育サレシ者ヲ母乳兒トセバ、1107名ノ母乳兒中1年以上2年迄母乳ト人工榮養トヲ以テ哺育サレシ者 80%ニシテ、2年以上ニ亙リテ此状態ガ續ケラレ、母乳供給ヲ受ケシ者ハ 20%ヲ算シ、生後10ヶ月以前ニ母乳ト人工榮養、或ハ人工榮養(牛乳、山羊乳、「キノミール」、練乳、粉乳、搗粉、重湯等)ノミニヨリテ養育サレシモノヲ人工榮養兒トセバ、454名ノ該兒中生後1年以内ニ母乳ノ供給ヲ絶タレシ者 72%ニシテ、1年以上2.5年間人工榮養ト共ニ母乳ヲ受ケ得タル者

28%ヲ示セリ。次ニ1561名ノ母ノ内、其ノ兒ヲ生後10ヶ月間母乳ノミニテ哺育セル者 71%ニシテ、10ヶ月以内ニ人工榮養ヲ加ヘザルヲ得ザリシ者 29%ヲ示セリ。仍テ文献ニ照シテ本項ノ意義ヲ案ズルニ金澤地方婦人ハ旺盛ナル乳汁分泌力ヲ有セルヲ知ル。

(III) 母乳兒 1157名中ニ於ケル學齡期以前ノ死亡率ハ 21%ニシテ、人工榮養兒 468名中ノ同様死亡率ハ 27.9%ヲ示シ、明カニ後者ノ此期ニ於ケル死亡率ノ大ナルヲ見ル。

(IV) 母ノ學歴ヲバ高等女學校以上卒業者(A)、高等小學校卒業者(B)、尋常小學校卒業者(C)ニ分類セバ、

(1) 母ノ學歴ト乳兒哺育方法トノ關係ヲ見

ルニ、分娩後10ヶ月間自家乳ノミニテ其ノ兒ヲ哺育セル者 (A) = 於テ 52.8%, (B) = 於テ 66.2%, (C) = 於テ 66.7% = シテ、其ノ殘數ナル (A) 47.2%, (B) 33.8%, (C) 33.3%ハ10ヶ月以内ニ人工榮養ヲ加ヘザルヲ得ザリシ者ナリ。乃チ學歷ト乳汁分泌力トハ逆比ヲ示セリ。

(2) 母ノ學歷ト兒ノ學齡期以前ノ死亡率トノ關係ヲ見ルニ、(A) = 於テ 20.3%, (B) = 於テ 20.8%, (C) = 於テ 27.9%ヲ算シ、母ノ學歷ト兒ノ學齡期以前ニ於ケル死亡率トハ逆比ヲ示セリ。

(3) 更ニ母ノ學歷ト兒ノ死亡年齡トノ關係ニ在リテハ、(イ) 生後15日以内ニ於ケル兒ノ死亡率ハ (A) 37.3%, (B) 33.9%, (C) 27.1% = シテ、(ロ) 15日以後1年以内ノ死亡率ハ (A) 14.5%, (B) 33.3%, (C) 50.7%, (ハ) 生後1

年乃至學齡期ニ於ケル死亡率ハ (A) 10.5%, (B) 23.2%, (C) 66.3%ヲ示セリ。

由是觀之、新産兒死亡率ハ母ノ學歷ニ正比シ、其後1年以内ノ死亡率ハ全ク之ニ反シテ逆比シ、其レヨリ學齡期迄ノ死亡率ハ更ニ逆比ノ度ヲ増加セルヲ見ル。之レヲ學歷ト乳汁分泌力トノ逆相關ニ對比スルト同時ニ、學歷ト生活程度並ニ幼兒哺育ニ關スル衛生思想ノ向上トヲ考慮セバ、學歷低キ母ハ概シテ身體壯健ニシテ乳汁分泌力モ亦旺盛ナルガ爲ニ新産兒ノ死亡率ハ低ケレドモ、其後ノ養育上ニ於ケル諸般ノ——缺陷ニ基キテ兒ノ死亡率ハ増加シ、學歷高キ母ニ在リテハ全ク之ニ反スル結果ヲ招來スルモノト推考ストモ敢テ當ラザルコト草カラム。

擱筆ニ臨ミ御懇篤ナル御指導ト御校閲ヲ賜リシ恩師笠森教授ニ對シ謹シメテ深謝ス。

文

- 1) **Roeses**, Zit. nach A. Epstein; Über Stillfähigkeit und Stillunfähigkeit. Jahrb. f. Kind. Nr. 33, 1905.
- 2) **K. Oppenheimer**, Über Säuglingsfürsorge in Paris mit Vorschlägen zum Säuglingsschutz in München. Mün. med. Wschr. Nr. 37, 1905.
- 3) **Steinhard**, Stillfähigkeit und stillunfähigkeit. Arch. f. Kind. 1906.
- 4) **H. Opitz**, Die Stillfähigkeit im Kriege. Mün. med. Wschr. Nr. 16, 1918.
- 5) **Blunenfeld**, Statistische Erhebungen über des Geburtenmaterials. Monatschr. Gyn. u. Geb. Bd. 68, S. 302, 1925.
- 6) **Brüning**, Zur Frage der Kriegsneugeborenen. Dtsch. med. Wschr. Nr. 21, 1921.
- 7) **Steinhard**, Vom Stillen in der Kriegszeit. Mün. med. Wschr. Nr. 26, S. 934, 1917.
- 8) **Halle**, Zit. nach A. Epstein; Über Stillfähigkeit und Stillunfähigkeit. Jahrb. f. Kind. Nr. 33, 1916.
- 9) **Cörper und Werner**, Zit. nach W. Kahn; Die Verbreitung der Hypogalaktie. Dtsch. med. Wschr. Jg. 43, 1922.
- 10) **W. Kahn**, Die Verbreitung der Hypogalaktie. Dtsch. med. Wschr. Jg. 43, 1922.
- 11) **Ploss**, Zur

獻

- Geschichte, Verbreitung und Methode der Frucht-abtreibung. Med. Chir. Encyclopädie, Bd. 2, 1883.
- 12) **Zangemeister**, Diagnostische und therapeutische Irrtümer und ihre Verhütung bei Neugeborenen. Mün. med. Wschr. 1922.
 - 13) **O. Heubner**, Über die Stillfähigkeit während der ersten Monate nach der Entbindung. Berl. Kl. Wschr. Nr. 281, 1911.
 - 14) **V. Jaschke**, Die Dauer der Laktation. Halban-seitz Biol. u. Path. d. weibes. Bd. V, 2.
 - 15) **Rähmann**, Über den Einfluss der Ernährung auf die Sekretion der Milchdrüse. Zbl. f. Gyn. S. 499, 1918.
 - 16) **Tschirch**, Zur Frage der Kriegsneugeborenen. Mün. med. Wschr. Nr. 47, S. 1651, 1916.
 - 17) **Mösser**, Über Kriegsneugeborene. Zbl. Gyn. Nr. 33, S. 864, 1916.
 - 18) **Herzog**, Das Gewicht unserer kriegskinder. Kinderarzt, 1916.
 - 19) **A. Kütting**, Über die Geburtswichte während des Krieges. Zbl. f. Gyn. Nr. 5, S. 166, 1921.
 - 20) **Franque**, Kriegsfolgen auf Geburt und Gynaekologie. Dtsch. med. Wschr. S. 335, 1918.
 - 21) **Thiemich**, Über die Einfluss der Ernährung

und Lebensweise auf die Zusammensetzung der Frauenmilch, Monatschr. f. Geb. und Gyn. 1899. 22) **Stolz**, Beeinflussung der Laktation. Monatschr. f. Geb. u. Gyn. 18, 1903. 23) **Gyogyaszat**, Einfluss der Ernährung auf die Milchabsonderung. Zbl. f. Gyn. Nr. 39, 1900. 24) **Grumme**, Subjektive und objektive Beeinflussung der Laktation. Mün. med. Wschr. Nr. 18, 1922. 25) **G. Nigris**, Über des Stillen und Ursachen des Nichtstillens. Wien. Klin. Wschr. Nr. 18, 1905. 26) **A. Epstein**, Über Stillfähigkeit und Stillunfähigkeit. Jahrb. f. Kind. Nr. 33, 1916. 27) **K. Franz**, Über das Stillen der Wöchnerrinnen. Berl. Kl. Wschr. Nr. 28, 1911. 28) **V. Jaschke**, Die Stillfähigkeit und die Ausbreitung des Selbststillens. Halban-seitz Biol. u. path. d. Weib. Bd. V, 2. 29) **Grath**, Zit. nach V. Jaschke; Die Stillfähigkeit und die Ausbreitung des Selbststillens. Halban-seitz Biol. u. path. d. Weib. Bd. V, 2. 30) **A. Mayer**, Bemerkung zur Zunahme der Geburtslänge unserer Neugeborenen. Zbl. Gynäk. S. 48, 1937. 31) **J. Lahorsky**, Some problems in the nursery of the newborn. Arch. Pediat. Vol. 45, P. 10, 1937. 32) **L. Spivek**, A consideration of present day newborn nursery practice. Jour. Am. Med. Ass. Vol. III, P. 12, 1937. 33) **E. Nittali**, Menarche und Laktation. Zbl. Gynäk. 16, 1938. 34) **P. Feldweg**, Stillfähigkeit und Stilldauer. Dtsch. med. Wschr. 24, 1937. 35) **V. Kindermann**, Die Säuglin-

gssterblichkeit in der Sudetenländern besonders bei den Deutschen und Tschechen. Med. Klin. Bd. 33, S. 25, 1937. 36) **篠田胤**, 生殖能力ト乳汁分泌, 日新治療264號. 37) **深山大和**, 乳腺機能ノ遺傳性ニ就テ, 昭和15年. 38) **古澤嘉夫**, 生活ト妊娠, 婦人公論15年4月. 39) **川添正道**, 簡明産科學上卷. 40) **時事年鑑**, 昭和14年, 死亡年齡別及主要死因, 乳兒死亡及主要死因, 全國乳兒死亡率. 41) **衛生局年報**, 昭和14年. 42) **谷口彌三郎**, 時局ト人口問題, 日本醫事週報44年2187號, 2188號. 43) **鈴木正**, 乳兒ノ人工營養, 醫生醫學13號23, 15號24, 16號24, 17號24, 18號23. 44) **森重壽夫**, 天然榮養兒ノ哺乳量ニ就テ, 兒科雜誌, 45卷, 10號73. 45) **同人**, 小兒保健ト給食ニ就テ, 日本醫事新報, 918號. 46) **森山豊**, 戦争ト産婦人科, 産科ト婦人科, 7卷9號, 12號, 8卷2號, 3號, 4號. 47) **同人**, 日本婦人科學會雜誌, 34卷7號. 48) **伊藤勝美**, 新産兒ノ哺乳量ニ就テ, 臨床産科婦人科, 13卷, 6號. 49) **訖摩武人**, **蘆澤美之**, 新産兒ノ授乳開始時期ニ就テ, 醫事衛生, 7卷15號. 50) **今津茂**, **山田昌義**, 授乳開始ノ時期ニ就テ, 臨床産科婦人科, 11卷9號. 51) **平井隆**, **安並廣**, 本邦新産兒ノ哺乳量ニ就テ, 産科婦人科紀要, 19卷11號. 52) **田北鑑夫**, **秋元東馬**, 新産兒ニ第1回ノ授乳開始スル時期ニ就テ, 助産學研究, 12卷4號. 53) **白井伊三郎**, **横川ツル**, 農村ニ於ケル乳兒死亡ト母ノ生活狀態トノ關係ニ就テ, 勞働科學研究, 14卷1號. 54) **藤本堇臺**, 滿洲人及大連在住本邦人妊産授乳婦ノ食物調査並ニ乳兒ノ食物調査, 日本醫事週報, 2131號.